

---

# adagio

神崎みこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

adagio

### 【Nコード】

N8163X

### 【作者名】

神崎みこ

### 【あらすじ】

人と上手く接することのできない秋音は、同じくあまり人に興味のない教師古瀬と出会う。戸惑いを覚えながら二人の距離はゆっくりと、ゆっくりと近づいていく。(capriccioさまからお題をお借りしました)

## 四月・はじめて

春は少しだけ苦手だ。

人とのやりとりが得意じゃないわたしにとって、クラス替えも、環境の変化も、それらを含む全てに対してハードルが高い。正直、逃げてしまえば楽なものな、と思わないこともない。

だけど、そんなことは口にも出さず、わたしはいつものようにへらりと笑って、友達とおしゃべりをする。

少し甲高い声がわたしの周りを飛びかい、新しい担任の登場によりそれは中断された。

ほっとして、わたしは決められた席に座りなおす。

基本的には代わり映えない生活。退屈で、だけど時間は確実に過ぎてくれることを知っている。好きなことも嫌なことも、何度も息をして眠ってしまったえば過去のことになるから。

担任は普通の中年のおじさんで、あからさまにがっかりした雰囲気。女の子たちから漏れていることを気にもしていない。簡単に説明をして、わたしたちはまた新学期第一日という少し特殊な日から日常へとスライドしていく。

二年生というゆるやかな空気の中、授業が終わった後はぼんやりと図書館で過ごす。それは一年生の頃からのことで、最初は妙に見られていたわたしの行動も、そのうちそういうものだと思われ認識されていた。

バイト以外はここで過ごすわたしは、いつも座る席に腰掛け、ゆっくりと厚い表紙をなでる。

古ぼけてやや痛んだその本は、有名なファンタジーのひとつであり、正直わたしには少し難しかった。

でも、その世界観が好きで、わたしは何度でもそれを手に取った。背表紙を開き、ページをめくる。

周囲の音が徐々に小さくなっていき、わたしは本の中へと没頭して

いく。

どれぐらい時間がたったかわからなくなったところ、カタンという小さな音でわたしは本の世界から引き離された。おそらく集中力が弱くなってきたのだろう。目をこすり、軽く肩を回して丁寧に本を閉じる。

「ごめん」

聞き覚えのない声がおりにきて、わたしはそちらへと視線を向ける。身に覚えのない謝罪を受け、わたしはその人物をきつと思つた以上に不審な目で見ていたのだろう。すっかり恐縮しきつた人物がこちらをまつすぐに見つめていた。

「音、たてちゃつて」

男の人は、事態を把握していないわたしを尻目に、淡々と説明を続ける。

おそらく、わたしが集中を切れさせるきっかけをつくつたであろうあの物音を立てた人だろうと、ようやく検討をつけた。ゆるゆると頭を左右に振つて、気にしていないと態度で示す。外はいつのまにか暗くなつており、あわてて時計を見ればここの閉館時間が迫っている。

いくらここにいたいと願つたとしても、所詮高校の施設を二十四時間開放してくれるわけではない。

のろろと立ち上がり、今まで読んでいた本を手取る。

「もう帰らないといけないですから」

ぎこちなく笑う。

「珍しいね」

それは、わたしがここにいることだろうか。それともここに高校生がいることだろうかと考え、おそらくわたしのことを知らないこの人は、後者を知りたいのだろうと推し量る。

「結構いますよ、常連さん。今日はたまたまわたし一人ですけど」

こんな辛気臭いところに、とクラスメートは言うけれど、意外とここには人がいる。そのほとんどが固定されたメンバーだから、数少ない変わり者の巣窟ともいえるのかもしれないけれど。

何かの資料なのか幾冊もの本を机の上に置き、さらには数冊の本を右手に持った人は、困ったような笑顔を作る。

話しかけたままではいいが、それ以上の会話を続けられないのだろう。先生にしては珍しいタイプだと観察をする。

記憶の奥底からひっぱりだし、この人が同じ学年のどこかのクラスの副担任だということを出す。

若ければ格好よくても悪くても人気のある商売において、この人の周囲は比較的静かだったこともついでに。たぶん、それはこの人の持った雰囲気のせいなのだろう。

熱血でもなく、だからといって冷め切ってもいない彼はいたって普通の人間だ。だけどその授業があまりにも単調で、ただこなせばいいだろう、という彼の態度に人気が集まりにくいのだと誰かが言っていた。

彼は教師という職業があまり好きではないのかもしれない。

「手伝いましょうか？」

確実に両手に余るその本たちに手を伸ばしたら、彼の左手に少しだけ触れた。

その瞬間、彼はものすごい勢いで手を引き、そして困ったように笑った。

その笑顔は仮面のようで、そして確実にわたしを拒絶していた。

「先生さようなら」

わたしはおもしろいものをみたような気分で彼に挨拶をし、そして図書館をあとにした。

人間嫌いの教師。

その矛盾した言葉に、彼に少しだけ興味を覚えた。

古瀬学という名前だと、あの先生のことがあったころには、時間は随分とたってしまっていた。

積極的に探しだすつもりも、知るつもりもない。

だけど、耳に入った名前は、わたしの記憶にしっかりと残ってしまった。

人の名前など覚えることが苦手だというのに、よくわからなくていつのまにかへらりと笑っていた。

「気持ち悪いなあ」

「ごめん、ちよっと」

それ以上は聞いてはこない彼は、わたしの額を軽く指先ではじく。

痛みに額を押さえ、涙目で彼を見上げる。

幼馴染で保護者のようでもある高井亮太の家に、わたしはこうして入り浸っている。

彼の父親は、仕事人間であり、あまりこの家にはたどり着けないでいる。

わたしの家は、両親そろってそれぞれの恋人のところにもいるの  
だろう。

もう顔もおぼろげな彼らを思い出し、乱暴に大根を切る。

「泊まってく？」

「うん」

いつもの会話を交わす。

コンロの上には味噌汁にする予定の出汁が入った鍋と、まだ何も入れられていないフライパンが一つのっている。

これから簡単な料理をして、亮太と一緒に夕食をとる。

わたしにとってはありふれた日常。

だけどふいに浮かんできた男の顔に、わたしは戸惑いを覚えた。

## 五月・手を繋ぐ

学生のころに読んだ本を読み返してみたくて、唐突に図書室というものに行ってみた。

将来のことなど何も考えず、ただなんとなく読まされていた本も、今なら別の感想をもつかもしれない。

そんな自分らしくもない思いつきにとらわれたのは、久しぶりにきたメールに影響されたせいだ。

他愛もない内容のそれに、どれだけ振り回されているのかも知らずに、それでも拒否もできないでいる。

かすかなそれでもつながつていたのだと、思い知らされる。こんなに未練がましい自分は、大嫌いだというのに。

少しかび臭い部屋に入る。静寂と懐古、という雰囲気押し寄せ、そんな経験はないのに懐かしさすら覚える

図書係がいるはずの場所には、誰も存在せず、そして図書室には一人の生徒がおとなしく座っていた。

運動部で適当にすごしていた自分は、学生時代にあんな風に熱心に本を読んだ記憶はない。ただ受験のためになる、だとか、忌まわしい読書感想文のための本探してぶらぶらした程度だ。

覚えていたタイトルの本を、片端から集め机の上に積んでいく。それだけでなにがしかの高揚感が得られ、こういうのも悪くはないという気分らせてくれた。

読みきれはるはずもない本が積まれた机の反対側には、一人の女生徒が座っていた。見覚えのないその子、とっても僕は人の顔をおぼえるのが苦手なだけ、は同じ格好ですつと本を読み続けていた。動いているのはページをめくる手だけ。

文学少女、というベタなイメージからは程遠い彼女に見入ってしまったのか、教師である自分が騒音の元を作ってしまった。

それに気がついたのか、彼女は本から目を離し、ゆっくりとこちらを向いた。

少し茶色がかった瞳がこちらをまっすぐに射抜いたような気がして、わけもなく目を逸らしたくなった。

手伝おうとした彼女が自分の手に触れ、瞬時にして大げさにその手を引き上げた。

彼女は驚くでもなく、悲しむでもなく、ただ淡々とこちらを見据え、そして笑った。手を繋ぐわけでもないのに、いやそれにしたところでこんな大げさな反応は成人男性がやっていいものじゃない。

彼女の白い手に、何かを思い出しそうになった。

言い訳するのもおかしくて、何も言えないでいる自分に、彼女はにこやかな顔を向けた。

そしてさようなら、といいながら何事もなかったかのように隣を歩き去っていった彼女の残したかすかな香りに、体のどこかが痛んだ。

授業は、教師という仕事のうちの一つにすぎない。

教えやすく、だとか、興味を持ってもらおう、だとかそういう気持ちを抱いたことはない。

与えられたノルマを、与えられた量だけきちんとなせばよい。自分自身が学生の頃をみても、必要以上に装飾過剰な授業は好きではなかったと言いつくす。

たぶん、きつと、僕はこの仕事を心から好きでいるわけじゃない。

「先生？」

自分の授業がわかりやすいのかわかりにくいのかも、正直よくわからない。嫌われても好かれてもいないせいも、そういう声が自分に届きにくいのだ。

だから、それを言い訳に、自分のスタイルを崩さないでいる。ただ、そんな僕にも必要以上に懐いてくる人はいて、それは主に年上に憧れる女子であり、そういう人間を僕はうまくあしらえていない。よくてせいぜい、少し素っ気無くする程度だ。上目遣いにこちらを見る子どもは、少女というよりもはや女の雰囲気を漂わせている。

「ああ、ごめん、どこがわからないの？」

せめて先生らしく、と仮面をかぶって、それなれりの対応をする。職員室には自分以外の職員もいて、みなそれぞれ仕事をしたり、おしゃべりをしたりして過ごしている。放課後の雰囲気はこんなもので、この学校には強烈に学生に好かれている先生がいるわけじゃない。そこそこ好かれ、そこそこ嫌われ、そして大部分には興味の対象外。たぶんそれが一番問題が起これなくて居心地のいい学校運営だろう。その典型例が自分というだけで。でも、たぶん、本当の意味で、彼らに興味がないのは、僕だけだろう。

ちぐはぐな文字で書かれたノートに目を落とし、丁寧に彼女の質問に答えていく。やがて満足そうな顔をした彼女は、舌足らずな礼を口にして帰宅していった。

周囲に気がつかれないように息を吐き、教科書をしまう。

「読みました？」

安堵したのもつかの間、声がかかる。

それは同僚からのものではありえなく、まだ幼さが残る少女特有の不安定な声音だった。

声の持ち主を探す。

記憶が、蘇る。

苦いメールの文章とともに。

一月ほど前に借りた本は、結局そのまま読まずに図書室へ返す羽目となった。

もともと読書などする習慣がない自分がどうかしていたとしか思えない。一冊目の序盤あたりで、もはやそれは睡眠薬と同義となっていた。

「ああ、まあ」

曖昧に答え、あの時挨拶を交わした少女をみやる。

彼女は笑顔を称えている。

その笑顔はどこか不自然で、だけどどうしてそう感じるかもわからない。

担任教師に何かを渡したあとなのか、おおよそ職員室に不似合いな中庸な少女は、軽く頭を下げて帰っていった。

再び、あの時と同じ残り香を置いて。

家路につき、無意識にパソコンの電源を立ち上げる。

最近は携帯でやり取りすることもあるものの、どちらかといえば男同士ではパソコンでメールをやり取りすることが多い。そのせいか、どうしてもルーチンワークのようにメールソフトをひらく癖がある。今日も、着信を知らせる音がなり、いくつかのメールを確認する。その中に、あの日の自分を浮つかせた人、からのメールが紛れ込んでいた。

フルネームで登録されたそれも、すでに違う苗字になっている元彼女からのメールだ。

クリックして、中身を読む。

そして、他愛もない内容の中に僕と細くでも繋がっていたい、とい

う意図が見え隠れしていた。

未練がましい気持ちからくる自意識過剰、と思い続けていた自分は、彼女のずるさに気持ちが軽くへこんだ。

だけど、それでも彼女の手をとりたいと思ってしまう自分がいて、やけくそになってメールを消去した。

繋いでいた手を離したのはむこうだ。

二度とつながれることのないそれを。

いつもより気分が上下しない自分がそこにいた。

いつのまにか落ちた眠りの中で、確かに誰かと手を繋いでいた。

それが誰かはわからないけれど。

## 六月・雨の音、二人きり

「ごはん食べてく?」といつてもあまつた弁当だけど」

「ああ、見張ってないと秋音は食べないから」

コンビニのバイトをやっているわたしを、たまに亮太は迎えにきてくれる。

親でも兄弟でもない彼が、わたしのことを一番思ってくれている。ただの近所の年の違う知り合いだった彼と、こうして二人で過ごすことがあたりまえになったのは、いつだったか忘れるぐらい前のことだ。

放置されていたわたしと、違う意味で放置されていた彼が行動範囲の狭い子供の頃によく出くわすのはあたりまえだ。人の多いスーパー、コンビニ、公園、そういったところを徘徊していた彼とわたしは、いつの間にか一緒に行動していた。

頭がよく、問題行動を起こさない彼と、頭はよくないけれども内向的なわたしは、対外的には大してトラブルを起こさずに、そして徐々にお互い顔の家で遊ぶことで落ち着いていった。わたしが曲がりなりにもまっすぐに育ったのは、彼の愛情があつてこそだと思っている。

たった数歳しか違わないのに、父親扱いしたら嫌がるだろうけど。わたしの家には誰もいない。

正式には両親がいるはずだが、わたしが生まれた歳に無理して買ったはずのこの家には彼らは寄り付きもしない。

きつと今頃それぞれの恋人のところにもいるのだろう。

わたしはそれを悲観するほど彼らに対して何かの感情を持ち合わせではない。

「泊まってく?」

「もちろん」

どちらの家かの違いはあるけれど、ほとんど一緒にすごすというのに、わたしは確認をしない日はいない。わたしは、わたしで彼に依存している。

役に立たない両親の代わりに。

そして、彼も彼でわたしに依存している。

いなくなってしまうた母親の代わりに。

健康的とはいえない関係は、それでもどうにか均衡状態を保ちながら続いている。

亮太がわたしに恋人でもできればまた違うのだろうけど。

そんなことを考えていたら、また、誰かの顔が浮かんだ。

その記憶をかきけすように、わたしは亮太の腕にしがみついた。

元々バイトがない日は図書室に入り浸っている。

大学生である亮太とは帰宅時間が違う。彼は遊んでいそうな外見とは裏腹に、真面目な大学生活を送っているらしい。

あの家には帰りたくない。

だけど、亮太の家に先上がりこむことはできない。そんなことは気にしない、と言われてはいるけれど、わたしの中のなけなしの線引きのようなものだ。

だからこうやって図書室にいるのだけど、試験勉強をしにくる人間どころか常連組みさえいなかった意味に気がつけばよかったのだ。

大粒の雨が図書室の窓を連打してようやく、わたしは彼らがない理由に気がついた。

空は真つ黒で、古典的な表現ではあるがバケツをひっくりかえしたような雨が空から降り注いでいる。

持ち合わせの折りたたみ傘で帰宅するのはいささか心もとない。

時計をみれば、閉館時間まであと三十分ほどとなっていた。

その時間で事態が好転するとは思えないけど、とりあえず窓を覗き込むために立っていたわたしは席に座りなおした。雨音しかしない室内は、かえって静けさが目立っていた。わたし以外に人がいないのだからなおさらだ。形式的な図書係ですらとつくに姿を消している。頬杖についてぼんやりと空をみる。もはやどれ程好きな話であろうと本に集中できるような状態ではなくなっている。

「あれ？人いたのか？」

驚きを含んだ声がかかる。

その声に聞き覚えがあつて、ぼんやりとした頭を働かせながら振り返る。

「鈴木・・・・・・・・」

聞き取れないほど小さな声で、その人がわたしの名前を呟いた。知られていることに驚く。

彼は、古瀬先生は生徒のことなど興味がないと思っていた。まして全くかわりのないわたしのことなど。

「古瀬先生は押し付けられたんですか？」

鍵束を手にした姿から想像をする。

歳が若い方に入る彼ならば、ここの責任者である教師から面倒くさい仕事を押し付けられそうだと。

予想通りだったらしく、苦笑して頷く。

「外ひどいぞ？」

「そうですねえ」

「帰れるのか？」

「まあ、なんとか」

短い会話を交わす。

眼鏡の奥には感情のよくわからない瞳が覗いている。

この先生は、いつもそうだ。

「送って行くのか？」

興味がなさそうな顔をした先生に、予想外の提案をされ驚く。

必要以上の接触を自ら図ろうとするタイプには到底見えないのに。

だけど、外の雨の強さを見て、さすがのこの人も知らんふりはできなかったのだらうと思ひ直す。

「迷惑でなければ」

先生は微かに笑って、こちらを手招きをする。

閉館時間には早いけど、わたしを追い出してここの戸締りを済ませるつもりなのだろう。

大人しくしたが、わたしは彼の隣に並ぶ。

暗い色の長袖のシャツに、思ったより細い手首と神経質そうな指先がみえる。

亮太とは違う。

しっくりと馴染んだ彼の体を思い出し、いつのまにか比較していた。

「いくぞ」

「ありがとうございます」

外の雨音だけに支配された車内は、ほとんど会話を交わさなかった

にも関わらず、とても居心地が良かった。

## 七月・会いたくて

目の端に入る女は、毒々しいとしか思えない色の唇を上下させ言葉をついでいく。

その姿を見て、やはりこんなところに来るんじゃないかなと思ったため息をつきたい気持ちを押しさえる。

せっかくの休みにあてられた友人の披露宴は、楽しい同窓会気分などではなく、ひたすら憂鬱なものだった。

会場の円卓に大人しく座り、与えられた酒をあおる。

全てを知る友人の哀れむような視線が鬱陶しい。

「女子高生かあ」

唐突に呟かれたそれは、大学の同期が齎したものだ。

昔からそのあたりにやや趣味が傾いていたことを知っていた他のメンバーは、明らかに呆れた顔をしながら若干強引に話を続けていく。この円卓の場を冷ややかにしていた原因が話し続けるよりもいいのだらう、と判断したのだらう。

話をさえぎられたような格好の彼女は、露骨にキレイに描かれた眉を寄せた。

「で、実際どうよ？もてるっしょ？」

「どうだらう？」

「またまたー、あの年頃って年上に憧れるもんでしょ」

うらやましそうにしている友人には悪いが、やはりそれほどいいものじゃない。

あの年代の子供はとても扱いにくいものだ。自分のような距離感をもってしてもたまにトラブルに出くわすほどなのだから、熱心に関

わりをもっている教師たちならなおのことだろう。

特に恋愛がらみのトラブルなど、巻き込まれることを想像しただけでうんざりする。

そして、やはり職業意識を問われかねないが、そのあたりの問題は見聞きすることが多い。

人と深く関わるのはごめんだ。

ましてそれが己の人生に関わるような面倒くささならばなおさらだ。女子高生を食ってしまう同職の人間は、実際いなくはない。表面化すればそれは純愛として婚姻関係を結ぶか、左遷されるか。身内に甘い体質ゆえに、職を奪われることはないにしても、それなりにペナルティーが科せられるのは仕方がないことだろう。それが、教職というものだと、したり顔で説教されそうではあるけれど。

自分は少女趣味ではない。

あの年代の不安定で、なおかつ自意識過剰な少女たちに食指をそえられることはない。

まして、自分は望んで教職についた人間ではない。

なんとなく流されて、なんとなく単位をとって、なんとなくそうなった。

切望して、それでも叶えられなかった人間たちにとっては、唾棄されるべき理由ではあるうとも、僕は僕で、生きていく術として今の仕事を必要としている。

だから少女たちにかまけている理由はないのだ。

酒のためにいささか回りくどくなった理由を脳内に繰り返し出し、またビールを飲み干す。

気の利いた給仕がさかさ空いたグラスに冷えたビールを注ぎ、満足してそれを口に含む。

「恋人はいないの？」

世間からすれば好ましくない話題に盛り上がっていた座卓に、冷や

水をさす質問が投げかけられる。

キレイに塗られた化粧の彼女は、余裕の表情で自分を見下していた。いくら鈍感だとはいえ、振った女の不遜な態度に気がつかない男たちではない。だけど、他人が答えにくい質問をさらりと口にする彼女の前に、周囲は口を出しにくい雰囲気陥っている。

私は私にふさわしい人と結婚がしたいの。ただそれだけの言葉を残し、去っていった元恋人に、精一杯の笑みを浮かべる。

「よりどりみどりとえばそうなんだけどなあ」

「あ、やっぱり女子高生？」

おどけた答えに、先ほど食いついてきた同期が混ぜ返す。

「肌とかぴちぴちでしょー」

周囲にいる女性に悪気がなく彼は好奇心を満たそうと質問を重ねる。そのたびに、元恋人はきれいに塗られたその化粧がひび割れそうなほどの表情を作り出す。

この程度の戯言で気分を害するのならば、あんなことをしなければいい。

抱いていた未練は吹き飛び、執着していた心がどこかへしぼんでいく。キレイだと思っていた顔も、仕草も、体系も、何もかもがうそ臭くて、人目で高級品だとわかる衣装すら彼女には不釣り合いに見えてしまった。

やや荒れた席も、新郎新婦の幸せそう笑顔が照らし、そして緊張を孕んだ時間は終了する。

二次会に出席するつもりもない自分は、そうそうに引き出物だけを

手に、帰り支度をする。  
いつのまにか距離を縮めてきた彼女に、できるだけ感情の籠らない表情を作る。

「二人で抜け出さない？」

まるで断られることを想定していない口ぶりに、自分は彼女のどこを愛していたのかわからなくなる。  
かわいい、とも、愛らしいとも思ってきた彼女の何を自分は理解していたのかと。

「悪いけど、明日も仕事だから」  
「でも」

甘えたような仕草で、右腕に隙なく塗られた爪をもつ右手を添える。  
それをさりげなく振り払う。

「化粧なんざしなくてもかわいいかわいい女子高生が待ってるから」  
思ってもいない嫌味を口にして、彼女を牽制する。  
あの連中に邪な思いを抱いたことは一度とてない。あくまで自分は職業としての教師であり、彼ら彼女らはただの客でしかありえない。  
ただ不意に浮かんだ、誰かの笑顔に、自分の中で戸惑いを大きくしていく。

二の句を継げない元彼女を尻目に、自分はようやく歩き出した。  
一喜一憂することがなくなるであろう自分を想像して、ようやく気分が晴れた。

「鈴木、化粧してるのか？」

分厚い本を開き読む体制に入ろうとしていた鈴木に、思わず声をかける。

その声は思いのほか大きくて、図書室を根城にしている連中から一斉に視線が向けられる。

ほとんどのそれらは、瞬時にして興味をなくし、自分たちの世界へと帰っていく。

ただ、鈴木に関しては、胡乱げに自分を見上げている。

「まあ、それなりに」

常から落ち着いた声音を、さらにポリウムを下げて返事をよこす。彼女が、声を荒げたところや、歳相応にはしゃいでいるところを見たことがない。もっとも、それほど彼女の事を知っているというわけではないのだけだ。

最近の流行なのか、黒々と塗られた睫毛を伏せ、彼女もまた本の世界に集中していく。

随分と大人びた顔を見せる横顔を尻目に、読む予定のない本を借りる手続きをとる。

珍しく仕事をしている図書係とやりとりをする間、不自然にならないように鈴木の様子を探る。

どうして、ただの一生徒のことが気になるのかわからない。

彼女とは、ここで初めて会って、挨拶を交わし、偶然大雨の日に送っていったことがある程度だ。

校内で、積極的に会話を交わす関係性ではない。

それならば、甘ったるい話し方をしてわからないことを聞いてくる他の子の方が、よほど親しいともいえる。

なのに、時折こうやってこの場にきたくなるのはどういいうわけな

のか。

手続きが終わり、たった一冊の本を抱え、職場へと戻っていく。  
まだ残された仕事の量を思い出し、うんざりする現実へと。  
会いたい。

ただそんな言葉が浮かび、それを頭の隅へと追いついていく。

## 八月・溶けちゃいそう

暑い中、わたしは自転車を漕いで市立図書館へと急ぐ。

昨夜、亮太の家に泊まったわたしは、彼と一緒に家を出た。

大学生らしくバイトとサークル活動とやらに忙しい彼は、規則正しい夏休みを送っている。

家にいていい、という彼の言葉を聞き流し、それなりに居心地のよい図書館であてもなく本を探す。

少なくとも、エアコンが効いているだけここは過ごしやすい。

ようやく今日読む一冊を決め、取ってあった席に戻る。

夏休みは人が多い。それでも図書館の本を利用しない学習を禁止したせいなのか、宿題をするためだけにやってきていたような人たちは減った。それでも、そこに適当に資料を机の上に置き、学校で与えられた宿題をこなしている学生もみかける。

それらをかいくぐり、ようやく手に入れた椅子にゆったりとすわり、そして本をめくる。

それだけで現実の世界が遠くなり、わたしは本の中に入っていく。どれほど時間がたったのだろう。

空腹を覚えて顔をあげれば、はずした腕時計は随分と正午から過ぎた時間を指していた。

面倒くささを覚え、再び本に目を落とす。

雑音が消え、体の瑣末な現象も感じなくなっていく。

ようやく本を読み終えたころには、閉館時間間際となっていた。亮太のバイトもそろそろ終わる頃だ。

固まった体をのろのろと動かし本を元の位置へと戻す。

軽く背伸びをしたあと、立ちくらみでその場へたりこんだ。

暗転した視界と、血の気が下がっていく感覚。じっとしてそれらが治まるのを待つ。

ゆっくりと回復していく視界にあわせ、立ち上がる。

こちらを振り返るうともしない周囲に沿うように歩き始めた。

「おかえり」

待ち合わせた亮太と一緒に、スーパーに買い物に行つて、適当にごはんをつまむ。

今日はわたしの家で、自分の家のようにくつろいだ亮太と一緒に戯れるように過ごす。

この時間は嫌いじゃない。

自分じゃない誰かの存在が、わたしが存在していることを強く感じさせてくれるから。

暗闇の中、混じり合つて、やがて眠りに落ちる。

ずっとこうやって過ごしてきた。

ひとりきりだと眠れないわたしに気がついて、救い出してくれた人。

「もう少し太れ」

わたしの体を触るたびに言う言葉をお休みの代わりに、亮太は眠りに落ちた。

どこかにそつと触れながら、わたしも眠る。

多分今日も夢をみない。

誰かが隣にいてくれから。

学校の開放日に図書室へ行つて、どっぷりと本を読んだわたしは、

暑さにへばりそうになりながら帰り道を歩いていた。

高校は比較的近い位置にあって、徒歩で通っている。この日も当然歩きで、暑さに陰りが無い夕暮れを後悔しながら歩く。

アスファルトからは容赦い照り返し、沈みかけだというのに勢いが衰えない太陽の光。

そしてぱったりと止まってしまった風に恨み言を呟く。

ようやく見えてきたコンビニの明りに喜ぶ。

自動ドアをくぐり、強い冷気を浴びる。

さして興味のない雑誌をめくり、ゆつくりとアイスを選ぶ。

今日は亮太がバイトで遅い日だ、だからあてのないわたしはこんなところで時間を潰すしかない。

涼しいところでお茶なのは、わたしの経済状態ではそう頻繁にやれることじゃない。

「鈴木？」

「古瀬先生？」

後ろから声がかかり振り替える。

古瀬先生が不思議な顔をして、こちらを見下ろしていた。

背の高い先生と比較的小さいわたしとは、実のところかなりの身長差がある。出会う場所は図書室で、わたしが座っている状態が多かったから気にしないようにしていたけど、改めて見せ付けられたみたいで、自分の成長のしなさぶりにがっかりする。

「先生アイスおごって」

とりあえず軽い感じで強請ってみたら、先生はあっけなくそれを許可してくれた。

拒否しそうなキャラの先生からそんなことを言われて驚いたままのわたしを尻目に、先生は自分の分も選び出す。

あわてて抹茶のアイスを選んで渡す。  
会計が済んだそれは、同じビニル袋に入れられ、なんとなく先生の  
背中を見ながらあとにくつついていく。  
無言でしばらく歩いたのち、もう誰も遊んでいない小さな公園にた  
どり着いた。

比較的キレイなベンチに座った先生の隣に、なんとなくわたしも腰  
掛けた。

少しだけ間を開けて、それでも今までにない距離に戸惑う。

「溶けるぞ」

「ありがとうございます」

口を開かないわたしに、先生は水滴のついたアイスを手渡す。  
言われるままに蓋を開け、食べ始める。

ソフトクリームの形をしたアイスを食べ始めた先生は、溶けるまも  
なく勢いよくそれを食べ進めている。

「家、近いんですか？」

「まあ、わりと」

会話が続かなくて困り果てる。

そもそもわたしも先生も話が上手なわけでも好きなわけでもない。  
なんとなく一言二言会話らしきものを交わすことはあったけれど、  
それ以上長文を聞いたこともなければ話した記憶もない。

ちっとも涼しくならない気温に多少いらつきながら、アイスを口に  
運ぶ。

甘みと冷たさが口の中に広がり、少しだけ気持ち落ち着く。

「宿題はやったのか？」

全くそんなことに興味がなさそうな先生が、先生らしいことを問う。

「なんとか」

家庭教師のアルバイトをしている亮太にしごかれて、いつのまにか宿題は終わってしまった。それ以上勉強させようとする亮太と、したくないわたしは、そういうところでは対立している。

どうも同じ大学に入りたいらしいが、わたしの学力と根性では無理だと、本人が匙を遠くへ放りなげている。

「意外だな」

「言われます」

わたしの外見は、どちらかというところ軽そうな外見に入る。

細くて猫毛で茶色がかった髪も、派手な顔のパーツも、少しいじれば大人がイメージする遊んでいる女の子だ。

だからといって中身がそうじゃないことを周囲に知らせながら歩くわけにもいかないし、言ったところで信じてくれるわけじゃない。

しよせん人間なんて見た目でほとんど判断されるのだから。

そんなことを考えてたら、先生の眉間に皺が寄っていた。

先生は、わたしとなけなしの会話をするときによくこの顔をする。

困ったような何かを考えているかのような。

それを知ってみたい、と思っただけで否定する。

わたしは、踏み込んだりいけな。

先生のアイスはとっくに終わっていて、カップが所在無く握られてる。

どうしてそんなことを言ったのかわからないけど、わたしは思わず口をついた自分の言葉に、わたしが一番びっくりした。

「食べる？」

気安い口調で、あくまで冗談のつもりで、スプーンで一口すくった抹茶アイスを差し出す。  
もちろん否定されるだろうと思って。  
だけど、先生はなんのためらいもなくそれを口にした。

「趣味まで渋いんだな」

そうやって先生はアイスを飲み込んでいった。  
先生が口をつけたスプーンをしばし見つめる。

大人と子供。

わたしはただの子供。

それだけを心の中で呟きながら、溶けかかったアイスを運ぶ。  
やっぱりそれは甘くて、冷たくて。

自意識過剰な自分を誰かが笑っているようで、黙ったまま最後まで食べ続けた。

ごちそうさまでした、と手を合わせたころには大分時間が過ぎていたようで、先生は笑ってわたしと別れていった。  
亮太と会える時間までもう少し。

誰もいない公園で、わたしは途方にくれていた。

## 九月・夏の幻想

嫌になるほど暑い夏が続いたまま、二学期が始まった。

そろそろ最終進路の提出がなされ、クラス分けが考えられるころだ。最終学年で担任になれるはずもなく、おそらくこのまま副担任のままでらう自分は割とのんきに構えたままだ。

進路を相談にくる学生も少なく、教科を教わりにくる学生も少ない。それは自分のとっつきにくくしているスタイルによるものだろうけど、やっぱりそれを変える必要性を感じていない。

膨大な事務仕事を片付け、さっさと仕事場をあとにしてねぐらへと帰る。

ネクタイを緩め、シャツをカゴに放り投げる。

シャワーを浴び、トランクス一枚にバスタオルを背中に引っ掛けた状態で冷蔵庫をあさる。

ビールの缶を取り出し、あおる。

苦くて冷たい液体が体中に広がり、外の暑さを忘れさせてくれる。

親父臭いが至福のひと時を過ごしていると、不躰なチャイムの音が鳴った。

そのままの格好でワンルームの玄関までいき、無言で覗き窓をみる。誰もが見惚れるような笑顔をした、元彼女が一分の隙もない格好で立っていた。

思案して、シャツと短パンだけをとりあえず身につけてドアを開ける。

チェーンをしたままで、それでも僅かしかない隙間から、彼女の香水の匂いがこちらへ届く。

「相談したいことがあって」

「力不足だから他をあたってくれないか？」

あまり彼女にしたことがない態度をとったせいなのか、完璧な笑顔が少しだけ曇る。

「学しか頼れなくて」

「旦那がいるだろ？」

自慢の旦那が、と付け加えようとしてやめた。

それでは、自分がまるで嫉妬しているみたいだ。

「ちよつと、でも、少しだけ」

言葉を濁しながら、からめ取るような仕草をする。彼女が瞬きをするたびに、甘えた気配が濃厚になっていく。

そういえば、彼女はそうだったな、と思いつく。

いや、正確には思い知らされる。

姉妹がいる友人たちは、彼女の事を割りりと冷たく判断していたはずだ。

あれは全て擬態であると。

そのときにはまるでわからなかったその意味が、今になって理解できた。

やる気はないとはいえ、難しい年頃の少女たちを数多く見てきたからだろうか。彼女たちはまだ幼いながら、似たような態度をとることがある。未熟さゆえのつたなさから、生徒たちのそれはまだかわいげがあるものの、元恋人のそれはまるでかわいげがない。

あんなに未練がましく彼女のメールが来るたびに一喜一憂していた自分が信じられない。

吹っ切れたあとは、なかつたことにしたいほどだ。

「ねえ」

女の煮詰めたの、と友人は彼女の事を評したことがあるが、確かにそれ以外現しようがない態度で甘えをみせる。

「悪いけど他あたって」

まるで他人のように、いや実際他人なのだけど、彼女を拒絶し、空間も遮断する。

閉じられたドアの向こうには声を荒げることなどない彼女が、唯一感情を表すかのように強いヒールの音をさせて去っていった。

ため息をついてベッドに腰掛ける。

勢いよく大の字になって天井を見上げる。

自分に対して影響を与えることがなかったことに、ようやく安堵した。

どんなことがあっても日常は淡々と続いていく。

まして勤め人ならば、こなさなければ明日にも困る。

社会人の無駄な憂いになど気がつくはずもなく、彼ら彼女たちは無邪気に学校という箱の中に集まっている。

「今帰りか？」

すっかりと暗くなった空を指しながら、偶然校外へと続く道で出会った鈴木に尋ねる。

彼女は帰宅部だが図書室通いが常で、帰りが遅いのも頷けるが、それにしても閉館時間を考えればやや遅い。そこまで考えて、すっかり一生徒である鈴木の行動の一端を把握している自分に驚いた。

「ええ、はい」

曖昧に笑って、見上げる。

色素の薄い髪に、瞳。

それが人工ではなくて天然だということは、近づけばよくわかる。

そして、その目鼻立ちのせいで無駄に派手な印象を与える彼女の顔立ちも、近づいて見てみれば最低限の化粧しかしていないことに気がつく。

そんなことを知らなかった頃は、ただ彼女を浮ついた女子生徒の一人だと認識していた。

携帯を片手に無意味に友達と話している方が似合う彼女が、図書室にいたから驚いた。

だから気になった。

ただそれだけだ。

自分がしていたイレギュラーな行動をなかったことにして、そう判断を下す。

「大丈夫か？」

自分の質問の意味がわからなかったのか、見上げたまま鈴木は首をかしげる。その仕草が小動物じみっていて、思わず撫で回したくなる。どちらかというと大人びた印象を与える彼女が、こんな雰囲気撒き散らすのはアンバランスでよくわからない引力のようなものを感じてしまう。

「夜も遅いし」

「そうですね」

一向にこちらの意図を解しないのはわざとなのか天然なのか。

図々しい子供たちなら、とくに甘えの一つも出てくるものなのに、鈴木はそういう素振りを一切みせてこない。

そついう子たちが苦手だったくせに、自分でもわけがわからないことを思っていることだけは理解している。

「何してた？」

責めるような口調は、教師らしくもありらしくもない。

だが、鈴木はあくまでさらりとそれを交わしていく。

「勉強、とか？」

こうみえて彼女の成績は悪くはない。目を見張るほどよくもないがどこにでもいる平均的にできる少女、というのは実はどこにでもいるわけではなく、彼女ほどほどに出来て出来ない生徒は実は少数派だ。

大抵得意な教科が出来ない教科を穴埋めする格好で平均値を形作る。そんなことに気がついているのは、自分だけなのかもしれないが。気がつけば、彼女のことを詳細に知る自分がいる。そんなつもりはなかったのだという言い訳すら出来ないほどに。

「進路は決めたのか？」

無難な言葉を口にする。

それがどれだけ自分という教師らしくなくとも。

「さあ」

だが帰ってきたのは他人事のような一言だった。まるで突き放されたかのように、鈴木は口を引き締め押し黙ってしまった。

この頃の子供たちは不安定だ。

未来や将来に不安に思うのは少女「らしい」とも言える。歳相応の一面を垣間見て、安堵と同時に寂しさが支配する。その感傷的な気持ちは、鈴木の一言で唐突に終了された。

「先生、さようなら」

彼女は何かに気がついたのか、校門のあたりで蠢く物体に手を振り、挨拶をして走っていった。

それが成人男性だと気がついたときには、僕はどうしても両手の拳を強く握り締めていた。

笑い声など聞こえるはずもない距離で、それが聞こえてきそうな錯覚に陥る。

見えなくなるまで、いや、見えなくなっても鈴木が歩いていった方向を見つめたまま立ちすくんでいた。

ようやく、誰もいないただの暗がりだと頭が認識した頃、のろのろと帰宅すべく駐車場へと歩き始めた。

よくわからない気持ちに支配される。

元彼女とのやりとりで神経がささくれだっていただけだと、言い聞かせる。

だけど浮かんでは消えるのは誰かの顔で、それはこの暑さが見せたただの幻だと言い聞かせていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8163x/>

---

adagio

2011年11月2日17時05分発行